

## 会津八一 叱る教師の真実<sup>(1)</sup>

——「學規」を中心として——

柏木隆雄\*

### 要旨

秋艸道人会津八一(1881-1956)は、『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』(1933)の古代美術史家、『鹿鳴集』(1940)などの歌人、『渾齋近墨』(1941)などの書家として知られるが、彼は長年早稲田中学、および早稲田大学の英語、英文学教師また東洋美術史の主任教授として研究教育の場にたずさわってきた。彼が元来俳句作家、評論家として出発し、教壇にあっては、学校の名物教師として多くの子弟を育てた功績がある。彼が弟子たちに与えた「學規」四箇条は、単なる学生たちへの訓戒以上に、八一自身の人生や芸術の自らへの指針であった。本論は、その四箇条をつぶさに検討して、従来テキストそのものとして十分に分析されてこなかった文章を味読し、その目指すものを検討した。そして彼の最晩年の作歌である四国屋島に戦後新しく鑄られた八栗寺の鐘銘について、その文学的意義を「學規」と照らし合わせながら分析し、八一における文学の大成としての鐘銘として位置付ける。

キーワード…会津八一、近代短歌・俳句、教育史、書道芸術

\*大手前大学名誉教授・客員教授

(1) 本稿は、二〇二二年九月二十三日、高松市の菊池寛記念館における「讃岐村塾」の「八栗寺梵鐘と会津八一 叱る教師の真実」と題した講演の原稿に加筆補正して論稿としたものである。機会を与えてくださった山崎敏範香川大学名誉教授に改めて感謝する。

## 一 蛙面房あめんぼうの面構つらえ

秋艸道人会津八一は、その号の一つ八朔郎はつさくろうが示すように、明治十四年（一八八二）八月一日に新潟市に生まれ、旧制新潟中学を二十歳で卒業した際には、すでに地元ではひとかどの俳句作者、研究家として新聞や雑誌への寄稿でその名を知られていた。明治三十二年（一八九九）七月から同三十五年（一九〇二）一月まで「東北日報」紙に全五十九回連載した「蛙面房俳話」あめんぼうはわは、彼が旧制中学四年十九歳で始めたもので、今なら考えられないような若造の寄稿と言えよう。記事の作者の偽名「蛙面房」あめんぼうは、水面をスイスイと泳ぐアメンボ（2）ーだが、その当て字の蛙面あめんは、いわゆる俗に言う「蛙の面に水」で、どんなに面罵されてもまったく気にしない、という意を示して、軽やかに滑っていくアメンボーと、傲岸な蛙として突き出す筆者の面構えが躍如とする。

その第一回の冒頭の辞に曰く、

予の俳道に入るや、日猶浅く、見聞甚だ狭隘、意識最も浅薄、頃者少暇を得、静読の余、愚論を述べ題して「蛙面房俳話」（あめんぼう）と云ふ。黄吻（こうふん）の呶々（なう）敢えて大方の諸君子を煩はさんとはあ

らず。（3）

当時のこととして、一応の漢文や古典文の素養があれば、この程度の文章は書けるのだろうが、十九歳の筆にしては、やや背伸びしながらも早熟の才を示すものと言っていいだろう。

それにしても「蛙面房俳話」で展開される芭蕉やその周辺、天明期の蕪村や一茶など、引用される俳句や俳書の数は、とても二十歳そこそこの青年のものとは思えない。それも新潟の守旧派の俳壇を相手にしての議論を主として、その論断や、きわめて勇ましい。もっともこの点については、八一が十年後に発表した最後の俳論である「わが俳諧」の中で正直に告白しているように、（4）「蛙面房俳話」の骨格は、ほとんど明治二十八年（一八九五）の正岡子規『俳諧大要』から来ているようで、その論の先鋭さも、あたかも八一が「蛙面房俳話」を連載し始める、その一年前の明治三十一年（一八九八）二月から三月にかけて、『日本』紙上に十回連載した評論「歌よみに与ふる書」で、真っ向から旧派歌人たちを攻撃、揶揄した子規の論調に倣うところが多い。おそらく子規の文章は若くて野心満々の八一に血沸き肉躍るものとして映ったに違いない。たとえば、

今の新派の句を観るに、口調の甚だ詰屈(きつく)にして朗誦に堪へざるものあり。是其詩想(しし)を尚ぶのあまり、一種の霸氣に駆られて声調を軽視したるより来るものなり。もとより区々たる繩墨の中に蠢々(しゅんしゅん)跼蹐(きよくせき)して詩(ポエジー)の何物たるやをも顧みる暇あらざる彼の宗匠輩の駄句の比にあらざるは論無しと雖も、其調子即ち音楽美を顧みざるは確かに一失なり。<sup>(5)</sup>

といった連載第一回の記事のやや青臭い議論も、子規の口調を髣髴(ふうふつ)させる。<sup>(6)</sup>

挑発的、戦略的な「歌よみに与ふる書」と較べると、同じ子規の「俳諧大要」は、遙かに論争の気配が少なく、俳諧についての基本的な知識と解釈が主で、おそらく八一は「わが俳諧」で彼自身が述べるとおり、子規の所説を手本に句作に励んだに違いない。それが三年後「歌よみに与ふる書」を読むに及んで、いわばその論調で新派の旧派俳人たちに攻撃を仕掛けたのだ。改めて八一の初期の文章を読み直すと、正岡子規の八一における影響は、きわめて大きいものがある感が深い。

彼の全集を検するに、明治三十二年あたりから八朔郎として十八歳の作句が見られるが、子規の指導下に、高浜虚子が編集して明治三十一年から刊行された句誌「ホトトギス」<sup>(7)</sup>に投稿もして、

明治三十二年六月から明治三十五年七月までの三年間で三十首ほど選ばれている。そこで選ばれた句はたとえば、  
家主に薔薇くれたる転居かな

(2) あるいは当時子規も社員となった新聞『日本』による俳句欄による、いわゆる「日本派」俳人の一人椽面坊(とちめんぼう)をもじるか。彼については漱石の『我が輩は猫である』(明治三十八年(一九〇五)―明治三十九年(一九〇六)「ホトトギス」掲載)の第一回に美学者迷亭がメンチボーをネタにした悪ふざけに使われている。

(3) 会津八一「蛙面房俳話」、『会津八一全集』第十卷、中央公論社版、昭和四十四年(一九六九)八月刊、四五頁。以下会津八一の文章は昭和四十三年(一九六八)から四十四年(一九六九)までに刊行された同全集収載のものに拠り、巻数と頁数のみを記すことにする。仮名遣いは原文を尊重し、漢字表記は原則として現在の常用漢字に変換している。又引用原文にないルビは私に振ってカッコに入れて示した。以下同様。

(4) 「今より追想すれば当年子が越後の俳壇に於て施した所のもの、例えば募集句の選より句合の判に至るまで、その大半は子規子(し)の影響の下に於て行つたのである。」全集第十卷、一六七頁。同、四六頁。

(5) とはいえ、彼が既にこの頃から詩句の「声調」を重んじる発言をしているのは、後の短歌における音調への強い慮りを予想させて、その詩境の成立について、きわめて重要なヒントを与えるだろう。明治三十年(一八九七)に子規支援の下、柳原極堂の編集で松山において発刊されたが、翌年東京に移る。

庵をめぐるますほまそほの<sup>（すずき）</sup>世かな

短夜を艦塗りかふる灯かな

困や雲吹き落とす佐渡の海

など、とりわけて名句と感嘆するほどではないが、十八歳の句としては、まずまず無難にまともめているというべきだろう。中でも「庵をめぐる」の句は、後年の、

しぐれのあめ いたくなふりそ こんどうのはしらのまそ  
ほ かべにながれむ

とある大正十三年（一九二四）刊「南京新唱」の歌を思い起こさせるのが注目される。

当年の会津八一は、俳名八朔郎として新潟の文壇、ジャーナリズムに知られ、彼自身も得意であったに違いない。明治三十二年七月、当時小説『金色夜叉』で人気をさらっていた尾崎紅葉が新潟に来た時、八一はその宿に赴いて紅葉に面会する。会津八一が残したメモに「新潟中学校五年の夏（七月）。新潟の東北日報といふ新聞に掲げし予の一文を見たるによりて面会したしと彼方<sup>（あつち）</sup>から申来る。」とあって、八朔郎として載せた「東北日報」の記事

に紅葉が関心を持ち、彼の方から八一に面会を申し込んできて、二回紅葉の宿で面談した、という。つまり小説家紅葉としてではなく「十千万堂」の俳名を持つ俳句作者としての紅葉が、新潟の俳人八朔郎に話を聞いたのだ。<sup>（8）</sup>

しかしそれ以上に会津八一を感激させたのは、同じ年に新潟に講演に訪れた坪内逍遙だった。八一は晩年に記した自筆の「年譜ノート」にこう記している。

一八八九（明治三十二年）年 十九歳

四月新潟中学五年級となる。夏新潟へ尾崎紅葉来る。面会す。

夏坪内逍遙新潟に來り港座にて講演。それを傍聴す。文学者と名のつくものをまのあたり見たるはこれが始めとす。（その態度と雄弁に感動す）<sup>（9）</sup>

会津八一晩年のメモ書きに、講演を聴いて発奮する地方の一青年の姿が如実に表れている。青年は一介の地方文士に収まることに飽き足らず思ったのだろう、翌年中学を卒業するや、上京して尾崎紅葉、正岡子規の自宅を訪問、その後いったん帰郷して地方新聞の俳句撰者を務めるが、やがて明治三十五年（一八九二）四月に早稲田大学英文学科に二十二歳で入った。以後八一は逍遙を

師として生涯尊重することになる。

## 二 教師への道

「師」を発見して、忠実に付き従う。このことは明治末年の當時、徹底して漢学の素養を積んだ八一にとつていつそう切実であつたに違いない。さらに彼が旧制中学時代に最も知識の涵養に努めた俳諧において、師弟関係の密がきわめて重要な要素であつたことも関係しているかもしれない。たとえば芭蕉と十哲と称される門下、そしてその後輩たちの関係、また八一が大きな影響を受けた正岡子規は、それこそ根岸派、「ホトトギス」派の総帥で、彼の周りには高浜虚子、河東碧梧桐かわひがしへきしろうの双璧を擁し、その他多くの弟子たちが子規庵に集つていた。この師弟関係の連携にきわめて敏感な俳句の世界に身を置いたことで、会津八一は「師弟関係」というものへの一種の憧れ、あるいは信仰めいたものを植え付けられたのではないか。

彼は早稲田卒業の後、故郷新潟の有恒学社に英語教師として赴任。後に逍遙の推薦で早稲田中学に招かれて教頭となり、早稲田大学で英文学の講師を兼任するが、この間、大正九年（一九二〇）あたりまで、多少の俳句や俳論を除いて、ほとんど著作を発表し

ていない。その中で「師弟合璧」（大正九年三月、未発表。全集第七卷所収）という文章は、故郷の先輩にして早稲田大学でも図書館長など重要な位置にあつた市島春城の収集になる蕪村とその弟子高井几童の句作や絵画を張り交ぜた画帳に、八一がつけた表題に基づいた序文である。

つまり坪内逍遙とともに師と仰いだ市島春城が、蕪村と几童の師弟の作品を自製の画帳へ貼り交ぜたものに、弟子の八一が題簽を書き、序を付して一冊に仕立てたわけで、江戸時代の師弟の作品を、早稲田の師弟二人がまた新たな芸術的な営みを完成する。それを「師弟合璧」と名付けるところに、八一の「師弟関係」への深い思い入れがあるように思われる。

じつさい会津八一が早稲田を卒業する際、師の逍遙が薦める新聞記者のポストなど、卒業までのある期間アルバイト的に働いてはいたが、自分自身は教師をしようと決めていたようだ。二十六歳になった彼が明治三十九年（一九〇六）八月に本家の叔父会津

（８） 宮川寅雄「茂吉・子規・紅葉に関するノート」、『会津八一全集』第十卷「月報」七頁。この「ノート」は八一晩年の自筆メモで、講演、随筆のための書き付けだから、あくまで八一の主観的記述で真偽を保証するものではないことは、留意しておく必要がある。

（９） 全集第十卷、三四〇頁―三四一頁。

友次郎に宛てた手紙にこうある。

小生は教師を以て最も割のよき、報酬多く勉強に適する仕事と存じ候こと、前々來確信する所に候へば、（略）之を得るに力を致し度存居り候。而して教師として始めより多くの収入を得がたかるべきは勿論にて候へば、小遣ひとりとして原稿も書きたく候。<sup>(10)</sup>

このいかにもあけつぷろげで、あからさまな、多少わざとらしい露悪趣味も見える教師志願の理由は、給料を貰えて勉強できることの魅力であり、勉強は、本人だけでなく、生徒にとっても重要なものという意識がそこにある。

彼が新潟の有恒学舎の英語教師として赴任するその年明治三十九年は、夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』が評判を呼び、漱石の文名大いに上がった年で、彼は自筆年譜ノートに

夏目漱石此年の春から文名あり。（吾輩ハ猫デアルの  
ほととぎすにて発表されたるためなり。）<sup>(11)</sup>

とわざわざ書きつけているのは、彼が馴染みの俳句雑誌「ホトト

ギス」に、漱石の人気作が載ったことも大きく作用しているようが、さらに翌年の「ホトトギス」正月号に田舎の中学に物理教師として赴任する青年が活躍する「坊っちゃん」が評判になったことも、彼の教師生活に大きな感慨を与えたに違いない。

たとえば教師になった二年目の明治四十一年（一九〇八）二月、義弟桜井正隆（天壇）に宛てて、

珍談続々あり。其の一例。生徒間に予が物理の教師を率いて新井のコモヤドに屢々遊ぶと云ふ信仰あり。依て生徒を呼びキサマ達も学校でも卒業したり自分の手足が動くやうになつたらば何でもやれ。親の脛を齧つて居るうちは駄目だぞ、いか（略）我が輩はもつと大袈裟に遊ぶ、云々。中等教員としては随分突飛と存じ候へども、あまりせせら可笑しさに喝破いたし候。<sup>(12)</sup>

新米教師ながら、後に彼の一枚看板となった「叱る教師」会津八一の片鱗がすでに覗く。その四年後、三十歳で師道遥の推挽を受け早稲田中学の英語教師となり、以後大正十四年（一九二五）四十五歳で同校を辞職するまで、「叱る名物教師」としての職を全うする。早稲田中学教頭としての彼の生活ぶりは、友人に宛て



た手紙にその片鱗が窺えよう。

何事もなく暮らしおり候へども、大学中学の授業のほか、門下の書生の世話やら新しい学士連の紹介といふやうなることにて忙殺せられ御無音打過候。(略) 学究八朔、教員八朔、俳人八朔、游人八朔、に態度のつかひわけ甚むづかしく相成候。<sup>(13)</sup>

「学究八朔、教員八朔、俳人八朔、游人八朔」とある順序が重要だ。すなわち勉強を第一とし、次に教師としての在り方、さらにエクリヴァンとしての俳人、そしておそらくは趣味に生きる游人、という彼の重点の置き方がよく表れている。早稲田大学の後輩今井安太郎宛ての葉書には、

学究八朔、教員八朔、俳人八朔、酔客八朔、親分八朔、游人八朔、病人八朔、悪党八朔、趣味八朔。かくの如く、いろいろに暮し居候。<sup>(14)</sup>

とも書く。注意すべきはここで俳人八朔とあって、歌人八朔とは書いていないことだ。つまり八一の頭には当時短歌はそれほど大

きな位置を占めていなかったことになる。

ほとんど同じ頃、その今井に彼は以下の手紙を送っている。

今回秋艸堂學規を作り候。左に御評を乞ふ。

- 一 深くこの生を愛すべし
- 一 省みて己を知るべし
- 一 學藝を以て性を養ふべし
- 一 日々新面目あるべし

これは拙居家塾の塾生の為に定めしものにて、拙者率先して実践<sup>(きんけん)</sup>躬行せんと欲するものにて候。御評正被下度候。<sup>(15)</sup>

(10) 全集第八卷、二四頁。

(11) 全集第十卷、三四二頁。

(12) 全集第八卷、三八頁。

(13) 大正三年(一九一四)三月、式場益平宛。全集第八卷、八八頁。式場益平は新潟中学の二年ほど後輩。自作の短歌や俳句を八一に送って評を仰いでいた。式場がいなければ「南京新唱」を出そうとは思わなかったと八一は後年述べている。

(14) 同年年月不肖、全集第八卷、九二頁。

(15) 大正三年八月二五日、全集第八卷、九〇頁。以後「學規」の表記は、八一のものについては「學規」とする。今井安太郎は早稲田大学の後輩で教え子。早稲田卒業後、山形県立米沢工業学校に就職した。大正九年五月校訓として制定した「一、お互いに敬愛の実を挙げよう 一、自己の本分は自ら進んで尽そう」は第五代校

※著者の意向により画像は公開しておりません

『秋艸道人の書』（中央公論社、一九六五年刊）所収

小石川の彼の借家には、故郷新潟から出てきた書生三人が八畳の間に同居し、その床の間に八一自身がこの簡条を記して掲げたという「學規」は、一般に学塾などにおいて書生たちの学ぶ態度や、学塾の方針を塾内に掲げたものだが、後年彼は自身の學規について「受験勉強で夢中になつてゐる書生たちは、誰一人としてそんな文句に目をくれるものはなかった」と述懐し、こうも書いている。

私はもともと理想とか、主義とか、抱負といふやうなものが  
あるのか、無いのか、自分にもはつきりしないが、とにかく  
そんなことを大ッぴらに口を出していひ立てるのを好まな  
い。そのせいか、私の學規も昔からあるものとはだいぶ様子  
がちがふやうだ。これくらゐのところを目安にしかかゝるな  
ら、長い一生の末までにはいくらか実行が出来るのではある  
まいか。<sup>(16)</sup>

式場、今井兩人に「學規」の批評を求めているところを見ると、  
八一自身大いに得意だったのだらう。じつさい今井宛て書簡の二  
日後、彼は「新潟新聞」に「落日庵消息」と称する文章を寄せ「學  
規」四則を並べて、「主張この内にあり、同情この内にあり、反



抗また此内にあり<sup>(17)</sup>と書き、坪内逍遙並びに同じ早稲田の評論家片上天弦の批評を引いている。

逍遙が「御塾則道学めかざる所最も妙、その悠然その<sup>(18)</sup>綽然<sup>(しやくぜん)</sup>、諸生を悦服せしむべく候」と評するように、上杉憲実が定めたという足利学校の、学ぶべき儒教の經典を指示する「学規三箇条」を始めとして、ほぼ儒教的精神を徹底する一般的な学塾の学則とは趣を異にする。たとえば官学の総本山江戸の昌平齋とほぼ時を同じくして、大阪の町人たちの肝いりでできた懷徳堂という学塾の規則はこうある。

一 書生の交りは貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事

但し、大人小子の<sup>(わきま)</sup>辨<sup>(わきま)</sup>は、之有るべく候。座席等は、新旧長幼、學術の浅深を以て、面々推譲致さるべく候

一 寄宿の書生、私の他出一切無用為るべき事

但し、抛る無きの要用、或は其の宿先より断り之有る節は、格別と為すべく候

一 寄宿の書生、講筵の謝儀は、十五歳より差し出さるべき事

但し、小兒迄も講筵列座は勿論の義に候

身分制度の厳しかった江戸時代において、これは画期的な規則として知られるが、讃岐藩の学主、後藤芝山が長男に与えた「雀鳴の庭訓」八箇条ほど懇切丁寧なものでなくとも、やはり道学的な色彩が無くもない。

しかし会津八一の學規は、調子もよく簡潔で、しかも何か鼓舞されるものがある。八一の弟子の中で、有名になった學規の下付を願う者が多くなり、八一自身もいささか出し惜しみて、<sup>(けいけい)</sup>軽々には与えない。真に弟子として認めた者に与える、としたので、いつそうその評判が立ち、貴重なものになった。とはいえ「學規」そのものについて、どこがどう優れているのか、人の心を打つところはどこにあるかをきちんと説明した文章は、管見の範囲でほとんど見当たらない。逍遙の批評にしても、「御塾則道学めかざる所最も妙、その悠然その<sup>(しやくぜん)</sup>綽然<sup>(しやくぜん)</sup>、諸生を悦服せしむべく候」と感心するだけで、分析的なところは全くなく、ただ漫然と空氣、霧圍氣を言うのみで批評とは言えまい。八一の學術上の愛弟子を

長川邊申松が今井安太郎、森谷與三郎両教諭の文案を基にしたとある。八一がそれ以前に今井に示した「學規」案に想を得たのではないか。

(16) 「學規」、昭和二二、三年頃 全集第十卷、三三九頁。

(17) 全集十卷、二〇一頁。

(18) 同、二〇二頁。

自負する宮川寅雄の「自ら期待する心境と自戒を表現したものと解すべき」として「しかもその底には、それに至りうるための創造の句読を厳しく要求する鞭も秘めている」という批評も単なる感想に過ぎないのではないか。

### 三 「學規」四条の意義<sup>(20)</sup>

では「學規」をどう読むか。

まず學規第一条「深くこの生を愛すべし」は、たしかに一般的な儒學塾の學則には見られぬ真率な表現で、ある意味きわめてロマンティックであり、またごく当たり前のこととして、今さら何を言っているのか？と訝<sup>いぶか</sup>ったり、馬鹿馬鹿しいと言う人もあるう。しかしこの學規を最初に目にする者は、十八歳前後、最も生きることに悩み、生きていることの意味に悩み、生きていることの辛さを実感する年頃の少年だ。「生」は愛するに足る。そのことを力強く、高らかに宣言してくれているこの文字を彼らが見たら、どれほど元気づけられるか。

とは言え、そんなありきたりな教訓を説くもの、とだけ第一条を解してはなるまい。ここは何よりも、自分が生きていることの自覚を促すものだ。まず生きている、或いは生を得ている、とい

う自覚、生きているからにはそのことを積極的に捉えなければならない。その生を支えるのがすなわち愛なのだ。その愛はまず何よりも自分が生きているという事実を認識し、生きている自分自身、そしてその「生」をまず愛する、それはそのまま他者の「生」への愛につながる。つまり生きとし生けるものへの生の営みに対する慮<sup>おもひばか</sup>りであり、その人生においてなされ、出会う森羅万象への深い愛に根差したまなざしを向けよ、の意にほかならない。まさしく「主張この内にあり、同情この内にあり」という会津八一の言葉が玩味される。

「生」をこのように肯定すれば、次に「生きること」を大切に思う「自分」とはどういう人間かを深く問わなければならない。そこで第二条の「省みて己を知るべし」が出てくる。

これはもちろん「論語」学而篇一―四にある、

曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而忠乎、  
与朋友交言而不信乎、伝不習乎  
われじにわがみをさんせいす ひとのためにはかたてちやうなるか  
ほうゆうとげんをかわしてしんたうざるや ならざるをたえしか

を踏まえたものには違いないが、八一の「學規」においては儒教的なあり方ではなく、生に値する人間であるかどうか、自分とは何者であるかを深く思い、自分の存在価値を問うている。自己の

人間としての完成度がどれほどあるか、よくよく自省することが必要だということ、『論語』の三省とはいささか趣きが違う。ここにこそ八一が「反抗また此内にあり」という言葉の真意が理解できる。

「己を知る」は、八一が自身に問いかけ、弟子たちにも問いかけた厳しい一条で、それは根底に芭蕉が弟子たちに求めた俳句の道にも通じるところがあるようにも思われる。斯く積極的な生を肯定し、己の値打ち、自分がどれほどまで完成されているかを問えば、当然自らの未熟が自覚される。その未熟をどのように補うか、いかにその生を過ごすか、いかなる生きざまが望ましいかが当然問われよう。そのためには「學藝」を中心にその根本を立てて、それを修養する過程で、人間としての本性を養うほかない。

そこで第三条の「學藝を以て性を養ふべし」が出てくる。江戸時代の儒者のように「立身出世齊家治国」として「天下泰平」へと繋げるのではない。ここで「学問を以て」ではなく、學藝の二文字を用いていることに注意する必要がある。これは学問と技藝、すなわちサイエンスとアートの二様に心をやって、そこに遊ぶ、自己の心の赴くままに打ち込むことによって、積極的な生を生き抜くためのバックボーンにせよ、という励ましにほかなるまい。「學藝」の「藝」は、八一が美術に知識があり、また詩歌に関心

があるゆえと解釈されそうだが、それだけではない。むしろ人としていかなる境遇においても、一勤め人であれ、職人であれ、農夫であれ、學藝を以て本性を養うことの必要を説いているのであって、「藝」は必ずしも高尚なアートでなくても、それこそ職人の技をも、ここでいう「學藝」の範疇に入れていることを知らなければならぬ。<sup>(21)</sup>

最後の第四条「日々新面目あるべし」は、先の三箇条の当然行き着くところ、生を深く愛し、學藝を以て人格を陶冶して、自らにその成果を問う。その結果として、日々、進歩の様があつて然るべしで、もちろん「三国志演義」にある呂蒙の故事にある「士別れて三日なれば刮目して相待すべし」に拠ろうが、これも相手に向かつて言うのではなく、自分がどう進歩し変化を遂げているかを自省する言葉であり、「あるべし」は、「それでないといけない」

(19) 全集第三巻、月報六、八頁所載の「編集室から」の西世古柳平の記事による。

(20) ここでは学を學、芸を藝と表記する。とりわけ芸は「うん」と読んで耕す意味になるから、会津八一は藝をこの漢字に移すことを忌んだ。

(21) 〃〃〃 Mon métier et mon art, c'est vivre. 「私の職業と技芸、それは生きることである。」というモンテーニュの『エッセー』（第二巻、六章）にある métier と art を思い起こす人もあろう。

という意味に表向きは取れはするが、「新面目があるように心がけねばならぬし、また当然新面目があることになる」と解釈した方が、八一の真意に近いように思われる。

しかも実は學規四箇条はこれで尽きるのではない。四番目に言う「新面目」が、また「深くこの生を愛すべし」の第一条へと自ずから移り、いよいよ「生」の充実が図られて、さらに第二条へ移り、そして必然的に第三条に至れば、また第四条が繰り返される。つまりこの學規は、止むことなく円環的に繰り返されるのだ。あたかもギリシャの初期詩人ヘシオドスが『仕事と日々』の中で示す暦のように、変化しながら、一つの巡りの中に繰り返されるように、また永遠の回帰を夢見る十九世紀ヨーロッパのロマンティックな精神にも基づいている。彼が卒業論文に選んだのが「美は真なり。真は美なり」と『ギリシャの古瓶に寄せるオード』で詠ったキーツであることを思い出そう。彼がギリシャ美術へと趣味を広げていったことと、あるいは軌を一にするとも言えるだろう。<sup>(23)</sup>

八一はこの學規を掲げて早稲田中学の英語教師、やがて教頭として校務に精励、その間、新聞等に多少の小文、雑記を書く程度で、大きな著作はない。それこそ学究八朔、教員八朔の日常が続くが、明治四十一年夏、彼が二十八歳の時初めて奈良に旅して、

短歌二十首を得る頃から東洋美術、短歌の世界への関心を深めていく。

彼の書簡集を見ると、ちょうどこの頃から、旅先から恩師の坪内逍遙、その友人で縁者にもあたる市島春城に宛てた手紙に、奈良の古寺や仏像を詠んだ短歌を示し、それらは推敲、取捨されて、十年以上を閲した後に厳選された九十七首を収めた『南京新唱』に結実する。彼の短歌については、すでに他の場所で説いた<sup>(24)</sup>のでここでは省く。彼の「學規」を背景とする「叱る教師会津八一」について論を進めよう。

#### 四 「叱る教師」の本領

師の叱責を受ける、それも自分の尊敬する師に叱られた話はよく話頭<sup>わとち</sup>に上るが、かつて中野好夫が「漱石の弟子たちは漱石から叱られたことを皆嬉しそうに語っている」と書いているように、叱る教師会津八一についても、弟子たちはいかにも嬉しそうに語っている。<sup>(25)</sup>しかし会津八一に叱られた、と言う人たちが、漱石や他の文学者たちの弟子と異なるのは、それが旧制中学の生徒や一<sup>ひと</sup>廉<sup>れん</sup>の東洋美術史家、歌人などきわめて幅広く、しかも単なる一場の説教だけでなく、絶交を宣告した後、かなりの期間本当に拒

絶の状態を続け、またふとした機会に元に戻ることもだ。もちろん破門は他の師匠たちも断行することはあるが、それは特定のきわめて陋劣な所業に原因があることが多い。一方会津八一の場合、叱責は所と場所を嫌わず、きわめて激しく、また同時にきわめて教育的であった。

短歌の弟子吉野秀雄が会津八一の知遇を得たのは、『南京新唱』をたまたま手に取って感激、その中の「まがつみはいまのうつつにありこせど ふみしほとけのゆくへしらずも」<sup>(26)</sup>と「みみしふとぬかづくひともみわやまの このあきがぜをきかざらめやも」の二首が分からぬので教示願いたい、と八一に手紙を出したことから始まる。八一は、大正十五年四月十五日すぐさま彼に書簡を送って二首の意を説明した後、

すべて南京新唱には故事実境をしらざるものに稍々<sup>(や)</sup>解しがたき歌多しとて書肆はいま少し詞書きを加へて註釈に代へたしと申たりしも必ずしも解せらるるを欲せずとて応ぜざりしわけにて、御質問の二首の如きはこれにて、可否ともに人の評せしことなし。即ち集中にて最も難解のものは此二首なればなるべしと平素自ら微笑いたし居たる次第にて候。南京新唱は日本紀、続日本書紀などの記載に関するものもあり、また

大和一遊の折もあらば、かの一巻を袖中<sup>(うでうちゅう)</sup>に御携へなされ候はば実地に於て最も明瞭にご理解あるべきかと存じ候。右あはせて申進め候。<sup>(27)</sup>

(22) 久保正彰『ギリシャ思想の素地―ヘシオドスと叙事詩―』、岩波新書八五五、一九七三年。

(23) 会津八一が早稲田中学の教頭となった頃、大正九年(一九二〇)に「日本希臘学会」を設立し、その趣意書に「希臘の盛時にありては物みな円満に具足して自在に生動せり。(略)もし希臘によりて学ぶところあらむと欲せば、須く先づ己に省みて修養せざるべからず。」(全集第七卷、六一七頁)と「學規」の趣旨に重なる語を述べていることも、このことを証する。会津がギリシャ文化に興味を引かれたのは、早稲田大学でラフカディオ・ハーンの講義を聴いて感銘を受けたことが大きいという(松沢英夫「有恒学舎時代の会津八一」、『秋艸道人を語る』、継志会、一九七九)。ハーンはギリシャ人を母としてギリシャに生まれている。

(24) 柏木隆雄「奈良の古刹、古佛をどう詠んだか―会津八一と吉野秀雄 古都奈良巡遊の歌をめぐる―」、『りずむ』第八号、白樺サロンの会、二〇一九年三月、三頁―二六頁。

(25) 蕉門の去来もまた、史邦の「泥がめや」の句の撰の際、「肝要の気色をあやまる事、筆の罪にあらず。句を聞事のおろそかに侍るゆへ也と、機嫌あしかりけり。」(『去来抄』岩波文庫、二二頁、一九三九年)など、叱られたことを自慢げに書いているような箇所が多い。

(26) 表記は八一が固執した表記を取らず、総平仮名書きはそのままに、品詞ごと分ける表記はせず、上下の句を分けるに留めた。以下この例に倣う。

(27) 全集第八卷、三四六頁。



と書く。この経緯<sup>いきいき</sup>を八一自身が昭和二十二年三月『夕刊ニイガタ』紙にこう回顧している。

私が大正十三年十二月に、最初の歌集「南京新唱」を出した時に、初めてこの人から手紙を貰った。（略）知己の無い世の中に、地獄で遇った佛のやうなこの手紙は、ありがたいものに相違ないのに、私の返事は冷然として不親切を極め、我が輩の歌は、万巻の書を読まず千里の道を行かざるものに、わかるわけがない、わからぬものは勉強すべし、とこんな風に、にべもないものであった。<sup>(28)</sup>

私信として吉野に与えた先述の「拙歌ご愛誦のよし忝く存候」以下の丁寧な口調の文とはまさしく裏腹の厳しさを披露して、さらに吉野のひたすらな精進を紹介、「創元」創刊号に寄せた「四号活字で盛り上げられた壺百餘首の吉野さんの歌を、聲をあげて朗讀してみたが、感激のために、何度も聲を吞んで、涙を押し拭った。そしてつくづくと思ひに耽<sup>(29)</sup>つた」として、吉野が八一の最初の手紙を表装して、結核の病を養う病間に掲げていたエピソードを紹介する。このいかにも感動的な一文は、冒頭、吉野への書簡の厳しさを強調することによって、最後に言及する彼の手紙を

表装した額の意味が深くなる。起承転結、じつによく練られた文章だ。もっとも秋艸道人会津八一の厳しさは本当だったようで、八一の同じ文章にこうある。

いつか、つくづくと吉野さんの述懐を聞いて、さすがの私も心中でほんとに恥づかしかったのは、ある時などは、恭しく上等の判紙に、謹厚ないつもの書体で清書して持つて来て差し出された詠草を、ろくろく目も通さずに、膝もとの畳にこぼれた番茶を押し拭つてそのままぱんと紙屑籠の中へ投げ込んでしまったこともあるといふ。<sup>(30)</sup>

このことは吉野秀雄自身が書いているから事実には違いない。まことに厳しい師弟関係だが、八一は「手足の揃った五尺の男児が、いやしくも芸術に志を立てて、一生涯を賭して成否を問ふといふことになれば、いつまでも、なまぬるい乳房などをあてにすべきではない」と言い放ち、

世間には、もっと親切げな、暖かさうな師弟の間柄はいくらもあるらしいが、手を取つたり尻を押ししたりしてもらつて、独り歩きが出来るやうになるのは、ありがたいとしても、そ



のうちに、歩きつきや後ろ姿までが師匠そっくりになる、それをば同門の間などには、自慢にしたり羨まれたりすることもあるかもしれぬが、大きく開いた曇りのない芸術の眼から見れば、いづれもつまらぬことである。<sup>(31)</sup>

と記す。その点吉野の歌のどこにも自分の歌に似たところが一つもないと八一が強調しているのは、八一のいわゆる「師弟」なるものの要諦を一言で尽くすものだ。

## 五 「叱責」の真骨頂

八一に親炙した吉野秀雄は、「叱る教師」会津八一の様々なエピソードを披露している。たとえば戦後、師の推薦で『夕刊ニイガタ』の短歌撰者をしていた吉野が、新潟を訪問した際、新聞社の人間や土地の芸者たちもいる宴で、もう飯にしよう与会津八一が言った時、「先生、あと一本だけお許しください」と言った瞬間、八一の眼が光り、衆人の中ゆえ叱責こそなかったが、これはまずいと思った吉野は、頼んだビールを一気に一本飲み干し、倉皇として食事の箸を取った。さて新潟から鎌倉に直帰した彼より先に「田舎者を食い物する卑しい奴だ！絶交する」という

会津八一 叱る教師の真実

師の手紙が先に届いていたという。<sup>(32)</sup>

ところが、巷間言われる弟子たちへひっきり無しに出したという叱責の手紙は、どういうわけか、全集の書簡集にはほとんど見出せない。叱られたのを嬉しく自慢するのなら、その証拠となる手紙が多く残っていて当然であるはずが、さすがに激越に過ぎるのか、それこそ顔から火の出るような思いを他人に知られては、とする懸念からだろうか、書簡集にある叱責の手紙は、せいぜい三、四通で、それらは確かに叱る教師会津八一の面目を十分に示しはするが、数の上で物足りない気がしないではない。

その中ではまず大正十二年十二月二十九日大泉博一郎に宛てた書簡。大泉は旧制早稲田中学の生徒とおぼしい。八一を訪れて自分の進路についていろいろ質問したようで、それに対して八一は、

己の才の小にして力の足らざる時には読書するもせぬも趣味ひろきもせまきも、どうせろくなものにならざることは明ら

(28) 全集第六卷、「友人吉野秀雄」、二五二頁―二五三頁。

(29) 全集第六卷、二五五頁。

(30) 同 二五三頁。

(31) 同 二五四頁。

(32) 『吉野秀雄全集』第三卷、「秋艸道人のこと」、一九五頁。筑摩書房、一九六九年。

かなり。（略）（一）極めて専門的なる凡人多し。（二）またかなり多趣味なる凡人もあり、（三）専門的にしてしかも豪き人もあれどもその数は最も少なく、（四）更に少なきものは多技多趣味にしてしかもすぐれたる人なり、此の程の人に至りては暁天の星の如し。君は一生を賭してこのうちのいづれにならんとするや（一）となるか（三）となるかは君の天才と力量による。（二）となるか（四）となるかも君の天才と力量とによるべし。しかし後者（二）（四）更に困難なり。しかるに君は世の中には唯の（三）の如き人と（二）の如き人のみなるが如く思いつめ居られたる如し。

と懇篤に教えて、末尾に「将来我等方に来らるる際は我等も何か教ふるやうな勢にて来らるることを望む。我等は年中一日も人の来ぬ日なく、（略）、我等今貧乏を極め病余にてもあり、冷やかし半分に來訪する人は一人にても少なかるやうに祈る<sup>(33)</sup>」と、普通にはなかなか口にしにくい注文をはっきりと告げている。

こうした手紙の往復数回を経てだろう、ほぼ一カ月後に八一は大泉に宛てた手紙の冒頭で、

十二月以来数回の書面にてやうやく根底的に君の御反省をう

ながし得たるよし、それにて微志も始めて通じたるものと本日御書面を拝見しながら、ひそかに打ちよろこび居り候。最初は御腹も立ちたるよし、それほどならば御印象も浅からざるべしとかへつてたのもしく存じ候。（略）逍遙先生の拙者に対せらるるは厚遇至らざるなく（略）、然るに同じく師弟として日夕交際しながら拙者が学生諸君に対するは、ややもすれば口ぎたなく痛責叱咤するのみにて、何程の事もつくし得ず省みて愧<sup>(34)</sup>かしく候。

と書いているのは注目に値する。この手紙で師の深い心を察して、叱責された学生は感激したに違いないが、ここにも「師弟愛」への八一の信仰が表れていよう。もちろん事実においても、八一はまめめしく師逍遙に仕えたが、そこに「師弟」としての在り方を実行する嗜好が強く働いていたことは間違いない。ただし八一が大泉生を叱ったはずの手紙は全集には収められておらず、感動的な手紙だけしか読むことができないのはまことに遺憾だ。

今一つ、岡山の旧制中学を出て東京で編集者となり、その縁で八一を知り、許されて住居にも出入りした料治熊太への昭和十二年二月十二日付けの手紙を挙げよう。

さて先刻仰せられし拙者揮毫の際、拙者の裂き捨てたるものにかへつてよきものありといふ御話はすでに数回承はりしことにて候へども、拙者としては非常に不快にのみ承り候間、将来は再び左様の御話なきやうに御注意相成り度候。これまでも左様な御話のある毎に拙者が愉快に承り居らざりしことは、貴下もその都度の拙者の返答の態度にて御分かりの儀と想像致し居りしも、あまり数回の事故改めて明瞭にここに申し上げ候。(略) 拙者の書いたものの真価を真にご了解なさるには芸術上拙者の程度まで御達しの上になされても遅かるまじく候。(略) 御感服御賞讃を辱<sup>(かたじけな)</sup>うするは年来ありがたく存じ居るも、左様な代価を払ひてまでも御賞讃御立立にあづかるべき必要もなきのみならず、(略) せめて書道につきては当方は御免を被り度候。<sup>(35)</sup>

こういう気概のある手紙を書く者は、今や絶滅危惧の分類に入られるのではないか。料治熊太は八一の死後『会津八一の墨戯』(アポロン社一九六九年刊)を出して、吉野秀雄と同様、叱る教師会津八一の姿を伝えているが、その中にこういう話がある。

ある正月、学生や年始客が八一を訪れて賑やかだったが、そこに上品な顔の学生が立派な装幀の画帳を差し出して、「今年卒業

なので国の父が世話になった先生方からお言葉を頂いて来いと言われたので、先生も」と言う。機嫌よく画帳を開いて見ると、早稲田の先生たちも一筆書いている。八一は「良し、その代わり墨を磨れ」と命じて、墨痕鮮やかに「万里清風」と書いて一座の者が感嘆する中、その場にいわせたまつた早稲田の馬術部にいた大佐に、その学生が「今伺っていると馬の絵がお上手ということですから、ここへ描いていただけませんか？」と頼んだ。その声が終わるか終わらないかに、八一が学生の頬を平手で叩いて、「その画帳を寄せせ！」と言い、「お前のような奴に俺の書を持たせるわけにはいかん！」と、せっかく書いた字をその筆で黒々と全部消し、「表具屋を呼んで来い、元通りにしてやる！」と叫んだという。学生が「正月早々人を殴るとは乱暴な！」と泣き声を立てると、会津八一はこう言ったそうだ。

貴様を叩けば俺の手だって痛いんだ。殴るのは俺の教訓と思え。大学を出ようとする奴が、そこにいる人がどんな人間か

(33) 全集第八卷、大泉博二郎宛て書簡三三七頁―三三八頁。

(34) 同、三二九頁。

(35) 全集第八卷、料治熊太宛て昭和十二年二月十二日付け書簡四三二頁―四三三頁。

を知らず、またこちらの人も貴様という奴をどんな人間かも知らず、いきなり出会い頭<sup>(がしら)</sup>に揮毫を乞うとは何たる無礼者だ。一生涯今日という日を忘れるな。貴様、蜜柑箱を担いできたようだが、持って帰れ。貴様のような奴が持ってきた蜜柑なんか、俺には酸っぱくて食えん<sup>(36)</sup>。

まことに凄まじい光景で、一座は酔いが醒めてシンとなった。その他いろいろの八一の武勇伝が伝えられるが、彼の怒りに対しての賛否は、その真偽も含めて、多様なものとなるだろう。

しかし八一は生涯この生き方を変えなかった。自分を曲げずに意地を張りとおしたのだ。彼の叱責の有り様を一つ一つ見てくると、先に引いた「學規」の文言が自ずから思い合わされる。その箇条に一々照らし合わせてみれば、なぜ彼が怒り、なぜ叱ったのか。その理由が推察されるはずだ。叱られる人間は、皆この「學規」に背いている。それは会津八一の弟子として、彼には到底許すべからざることだった。

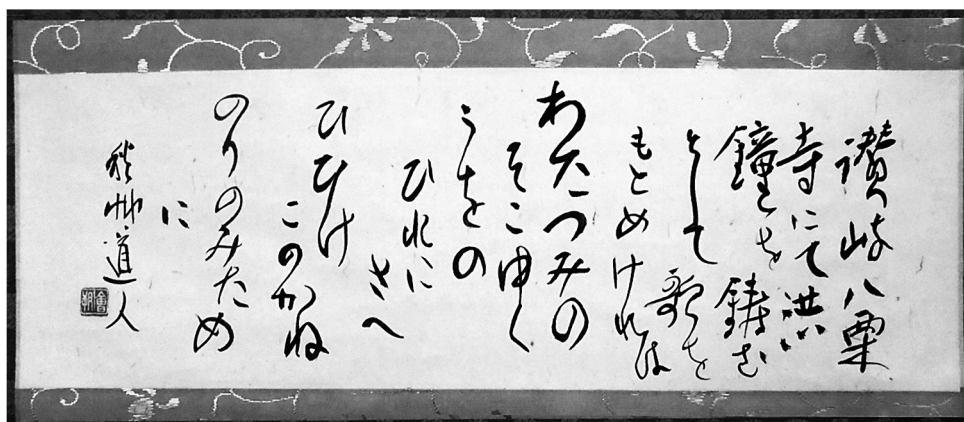
こうして早稲田の名物教師として、また歌集『鹿鳴集』の著者として、知る人ぞ知る存在となった「叱る教師」会津八一は、孤高狷介<sup>(けんかい)</sup>の態度で終始独身のまま、一生涯それを押し通す。現実においてそれは難事には違いないが、意地でもそれを貫いた。その

意味で、終戦間近の昭和二十年七月、彼の身辺を少女の頃から世話してくれていた養女キイ子の死は大きな打撃となった。その死に際して詠まれた『山鳩』の絶唱二十一首は、文字通りの彼の白鳥の歌とも言えよう<sup>(37)</sup>が、八一が三十歳の時に自らの生き方を定めたとと言える「學規」四箇条の意味と意義とをつぶさに見てきた今、真の意味での絶唱となった屋島の八栗寺の鐘に刻んだ歌は、まさしく彼の生涯を三十一文字に尽くした名作と言えよう。

## 六 八栗寺の鐘銘

昭和三十年(一九五五)の春、八栗寺住職中井龍瑞僧正が良鐘新鑄の宿願を果たそうと、その鐘銘を誰に依頼するか。旧知の岡山法界院住職松坂旭信に相談すると、言下に会津八一を推薦。相談の場に八一の書が掲げられていて、自身も書に堪能で個展も開く旭信師が深く傾倒する書家ということで、龍瑞僧正も意を決し、旭信師に八一との交渉万端を依頼することになった。<sup>(38)</sup>以後の経緯は八一の書簡を検して知られるが、昭和三十年十一月八日、その作の漸く出来たことを知らせる書簡には、

拝啓 かねてご依頼の鐘銘の原稿は、数日朝夕推敲の末、や



会津八一書 八栗寺鐘銘の歌（八栗寺蔵、山崎敏範氏撮影）

うやく次のごとくご承知被下度候。ご一覽の上甚だしき不都合あらば至急御申越被下度候。「五剣山八栗寺の 鐘は戦時供出し 空しく十餘年を 経たり今ここに 昭和卅年十一月 龍瑞僧正新に之を鑄むとし余に 歌を索む乃ち一首を詠じて之を 聖觀世音菩薩の 寶前に捧ぐその 歌に曰く わたつみの そこゆくをの ひれにさへ ひびけこのかねのりのみために 秋艸道人」<sup>(39)</sup>

とあり、さらにその苦心を以下のように述べている。

(36) 料治熊太『会津八一の墨戯』、アポロン社、一九六九年、一三六頁―一三七頁。この書には「荒れる日の秋艸堂」と題する章に、「叱る教師」の姿が如実に映されているし、早稲田中学の教え子小笠原忠「鳩の橋」は、教頭時代の八一を活写している（一九六五年『文学界』十月号に掲載され、後いくつかの書店で刊本になっている）。

(37) 前掲『りずむ』第八号所収の拙稿参照。

(38) 市島成一の「八栗寺の鐘」（前掲『秋艸道人を語る』一五三頁）及び一九五七年八栗寺発行の『八栗寺の鐘』に詳しい。大森捷二「ひびけこのかね―澄める韻よ」（『四国作家』五四号所載）参照。またこの鐘銘の書としての工夫については、角田勝久「會津八一が生前に揮毫した金石文の特質」（『書学書道史研究』第十九号、二〇〇九）などがある。

(39) 全集第九卷、二五六頁―二五七頁。原文は鐘銘の部分は署名まで十七行で記し、注記もあるが、便宜上本文の如く書した。



1. 一句が二行にわたらざるやうに氣をつけたること。（略）  
これは鐘の實物を仰ぎ見て、この文を讀まんとする來觀者に便ならしめんとせしにて候。（略）殆ど（自分ながら）その目的は達し得たる如くに自信いたし候。

2. （略）

3. 歌一首は四日間かかりて詠み据えたるものにて、自ら惡作にあらずと自信あるものにて、自家の全集の將來の版には追加するつもりにて候。

4. 寺の實境と符合せざることを恐れたるは、寺の實境と海との距離を知らざるがためにて候。鐘聲の魚耳に入ること  
もあらんかと念じて詠みたるも、果たして然るや否や。

5. この寺の名は、柴野栗山の號の源<sup>（もとは）</sup>づくところなることに興味を覚え、この鐘聲を地下の大儒の聞かんことに空想を走らせつつ筆を馳せ申候。ことに栗山も相當の書道家なりし故、世代を異にせば彼が筆を馳すべかりしことなども考え及び申候。

（6、7、8は省略<sup>（40）</sup>）

いかに会津八一が自己の芸術に細心の注意を払うとともに、読み手を強く意識していたかが窺われよう。たしかに従来の梵鐘の

銘は漢文が殆どで、遺憾ながら現今それを容易く訓み下す人間は限られる。会津八一は戦後の国語教育のありようを直視し、かつ歌は「響き」であり、耳からの詩と考えて総平仮名で、語彙の單位に分けて表記する流儀を採用してそれに固執した。それがこの八栗寺の梵鐘の銘文と歌とで、みごとに結実することになる。

歌は平易にして音調整い、これを眼にしても、口に誦<sup>じ</sup>しても名作と称するに足る。まず「わたつみの そこ ゆく」は、大きな海の底という、謂わば八栗寺から見はるかす海の水平に伸びる距離が浮かび、さらに「底」とあることで、垂直の深さが大きく思いやられ、かつ「そこ」と平仮名で表記されることで、「其<sup>そこ</sup>処」  
とも読め、読む者をして海の最中<sup>さなか</sup>にあるが如くに感じさせる。

わたつみの底は、水平、垂直ともに静止した視線で捉えられながら、そこに「そこゆくをの」悠々と泳ぐ姿。魚はまず単数としてイメーじされ、さらに日本語の特質を生かして、複数の魚の群へと膨らむことになる。広々とした海の静と群れなす魚の動とが、第一句、二句で大きやかに歌われ、しかもその魚の「ひれ<sup>（鰭）</sup>」という、ある意味で微細な視点を持ち込むことによって、胸びれ、尾びれ共に、具体的なイメージを想起させ、群れなす魚の頭から尾までの大きさ、距離などが、読む者の想像力の中で様々な次元をもつて現れてくる。



「ひれ」はまた万葉集にある松浦佐用比売の伝説に見る、彼女が振る「領巾ひれ」とも音が通じて、人を招いたり、別れを惜しんだりする仕草や情を代替して、魚の鰭ひれと同音の領巾ひれを連想させることによって（ここで八一の総平仮名書きが、みごとに効果を發揮する）、死者に対する供養の鐘の意味が浮かび上がる。

魚の鰭は細かく顫動せんどうしてアンテナの役割を果たし、あたかも遠い鐘の音の響きが、大きな魚の鰭の運動のように震動して四方に伝わり、それは仏教の教えが四海に、永遠に絶えることなく浸透していくイメージを明確に伝えることになる。ひれ、ひびき、と、「ひれ」の音を連ねて鐘の音が飛翔するイメージを醸成し、さらに「このかね」とKの音がそれに続いて、鐘声の擬音となって響く。第二句の「そこ ゆくうをの」の「そこ」は、先述のとおり、海の底を言うのだから、同時にまのあたりに見る「其処そこ」でもあり、具体的な死者たちのイメージをも喚起する。そしてここではオO、とウUの母音が主体となって、重々しい響きを伝え、第三句からはイー、エEの母音、さらにアAの母音も添えられて、明るく転調する。すなわち「ひびけ このかね *hibike konokane*」と、鐘の響きに込められた祈りの未来への志向を、文字にも音にも表しているのである。<sup>(41)</sup>

魚は死んだ人間を食べる、とも言う。そして魚がきわめて宗教

的な意味を内包することは、経文に親しんだ八一が知らなかったはずはない。また初期のキリスト教において、魚を意味するギリシャ語「イクトウス」*ichthys*あるいは「イクテュス」*ichthys*が、「イエス、キリスト、神の子、救世主」の頭文字を並べたもので、キリストを表彰することも、ギリシャ文化に親しんだ八一の頭を過ぎったことだろう。

死の前年、七十四歳の会津八一が八栗寺の梵鐘の銘文を求められた時、芸術家として後世への名声を期待したことは、もとより想像に難くないが、同時に過ぐる太平洋戦争において多くの戦場で空しく散った、それこそ遠い南方の海の底に眠る多くの教え子たちへの哀惜の念、十年前に病死した養女キイ子への鎮魂もまた込められていたに違いない。それが結句の「のりの みために」

(40) 全集九巻、二五六頁―二五八頁。

(41) モーリス・グラモン『フランス詩法』Grammont, M. *Le vers français*, Delagrave, 1913の所説を踏まえてルネ・ウェレックらは、「一つの言語体系の中には、語の『骨相学』のようなもの、すなわち単純な擬声語より、はるかに力のある音、象徴が存在するのである。高母音（e.i）と薄い、速度の高い、明晰かつ明るい物体との、また低母音（o.u）とぶざまな、のろい、退屈な、暗い物体との間の、根本的な連想は音響上の実験で立証することができ」と言っている。R. Welleck, A. Warren, *Theory of Literature*, Penguin books, 1963, p. 162.

という祈りの言葉として結晶する。「のり」は、もちろん仏の教えを言おうが、人の踏み行うべき「規則<sup>のり</sup>」をも意味しよう。

もう一度会津八一の「學規」四箇条を思い起したい。八栗寺の梵鐘に鑄られた短歌は、いわば秋艸道人会津八一の最後の芸術活動として、彼が生涯を通じて自らにも、周囲の学ぶ人々にも、「のり」すなわち尊<sup>たっと</sup>ぶべき規則として課してきたことに対する最終的な答えとして、みごとに現前するように思われる。まさしく「叱る教師」会津八一畢生の作として、もっとも高く評価すべきものだと言え、泉下の秋艸道人も、莞爾として首肯するのではなからうか。